



務

土木學會誌 第十八卷第一號 昭和七年一月

○昭和六年十一月二十五日役員會を開く、那波會長、眞島、前川の兩副會長、中山前會長、池田谷口、田井、木津、平井、春木の各常議員、丹治主事出席、那波會長議長席に着き下記事項を決議せり。

△大堰堤委員會刊行物を一般會員に配付するの件を承認すること。

△鐵筋コンクリート標準示方書及同解説の販賣方に関しては會長及兩主事に一任する事。

△昭和七年度收支豫算に關する件は之を承認すること。

○同年十一月十五日土木學會誌第十七卷第十一號發行成規の手續を了し翌十六日各會員に配布せり。

○同年十二月五日第三十回用語調査會幹事會を開く、中山委員長、中川幹事長、田中、鈴木、樫部、富永、黒田の各幹事、中川、白石兩囑託出席、道路之部及鐵道之部に關する分科會案に就き審議をなせり。

○同年十二月十四日役員會を開く、那波會長、古川、中川の兩前會長、眞島、前川の兩副會長、池田、木津、田井、谷口、平井の各常議員及丹治主事出席、那波會長議長席に就き下記事項を決議せり。

△第二回工學會大會土木部會に於ける講演者選定の件は編輯委員長に一任すること。

△同大會通俗講演會に本會より講演者一名選出の件は會長に一任すること。

△昭和七年度總會に關する件は原案を承認すること。

△日本工學會用語統一委員會本會選出委員中川吉造君辭任に付き後任として會員藤井眞透君を推薦すること。

○昭和六年十一月十六日以降十二月十五日迄に入會の手續を了し名簿に登録したる者下記の通り。(○印は轉格を示す)

准 員

○巖 巖君 井上秀松君 橋本健次君

學 生 員

川口克久君 小早川智義君 岩永俊彦君 老田務君

金田義雄君 米谷榮二君 佐伯武男君 牧直君

○下記諸君は退會せられたり。

會 員

川庄震吉郎君 小野常治君 加賀種二君

准 員

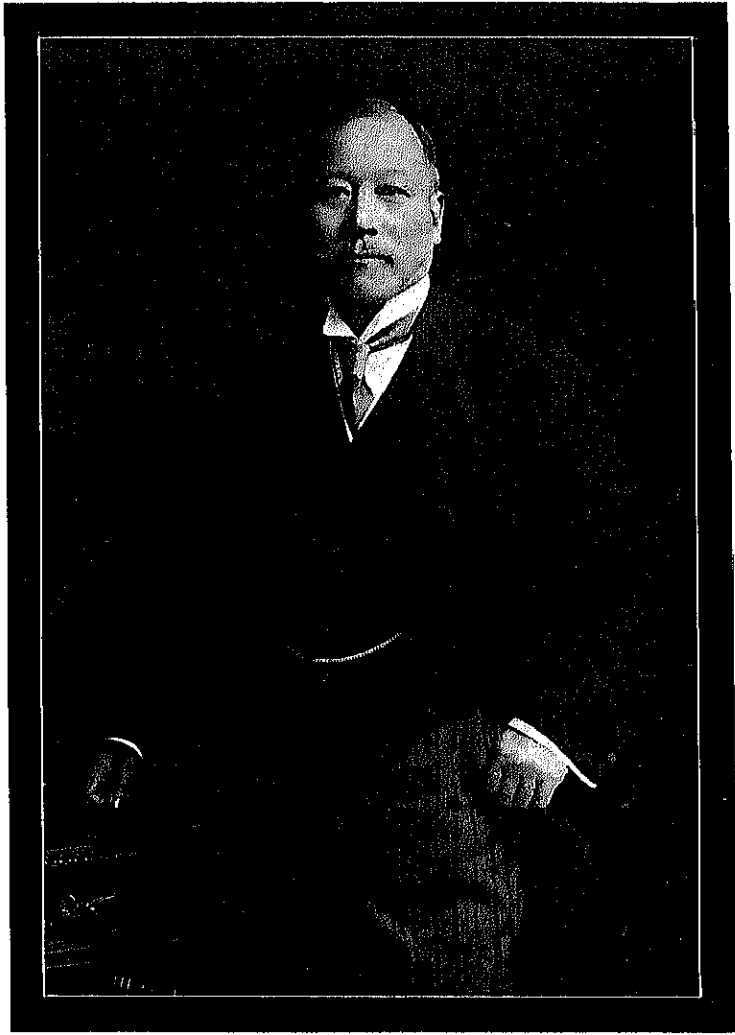
馬場宗光君 佐々木秀雄君 伊村高親君 川上收治君
 中山芳雄君 小島晋君

○昭和六年十一月十六日以降十二月十五日迄に於て寄贈又は交換を受けたる雜誌其他下記の通り。

國立公園 第 3 卷第 11 號	1 冊	國 立 公 園 協 會
稻工會雜誌 第 7 號	1 冊	早稻田高等工學校稻工會
堰堤と貯水池に就ての所感	1 冊	日 本 動 力 協 會
動力 第 14 號	1 冊	同 上
セメント工業 第 21 年 12 月號	1 冊	土 木 建 材 商 報 社
復興局道路工事設計基準並工事仕様書集	1 冊	復 興 事 務 局
復興局道路工事材料購買仕様書集	1 冊	同 上
工事畫報 第 7 卷第 12 號	1 冊	工 事 畫 報 社
材料の分離がコンクリート桁の強度に及ぼす影響	1 冊	會 員 吉 田 德 次 郎 君
鐵と鋼 第 17 年第 11 號	1 冊	日 本 鐵 鋼 協 會
東京工業會誌 第 33 卷第 11 號	1 冊	東 京 工 業 會
機械學會誌第 34 卷第 175 號	1 冊	機 械 學 會
The Excavating Engineer Vol. XXV No. 10 & 11	2 冊	三井物産機械部型錄室
都市公論 第 14 卷第 12 號	1 冊	都 市 研 究 會
セメント界彙報 第 272 號	1 冊	日本ポルトランドセメント同業會
セメントコンクリート道路 第 2 號	1 冊	同 上
東京土木建築業組合報 第 4 卷第 11 號	1 冊	東 京 土 木 建 築 業 組 合
工人 第 120 及 121 號	1 冊	日 本 工 人 俱 樂 部
工學 第 19 卷第 11 號及第 12 號	2 冊	東 京 工 學 社
帝國鐵道協會々報 第 32 卷第 11 號及名錄	2 冊	鐵 道 協 會
業務研究資料 第 19 卷第 40 號	1 冊	鐵道大臣官房研究所
土木建築雜誌 第 10 卷第 12 號	1 冊	シ ン ビ ル 社
滿洲技術協會誌 第 8 卷第 46 號	1 冊	滿 洲 技 術 協 會
水曜會誌 第 6 卷第 8 號	1 冊	水 曜 會
全國都市問題會議會報第 1 號	1 冊	全 國 都 市 問 題 會 議 事 務 局
内外工業時報 11 月號	1 冊	最 新 工 學 普 及 會
電氣學會雜誌 第 51 卷第 11 冊	1 冊	電 氣 學 會

造船協會雜誌 第 115 號	1 冊	造 船 協 會
混凝土講習會講演集 第 2 集	1 冊	日本ポルトランドセメント同業會
工業化學會雜誌 第 34 編第 11 冊同歐文綴	2 冊	工 業 化 學 會
セメント工業 第 21 年第 11 號	1 冊	土 木 建 材 商 報 社
港灣 第 11 號	1 冊	港 灣 協 會
建築雜誌 第 551 號	1 冊	建 築 學 會
電氣製鋼 第 7 卷第 11 號	2 冊	電 氣 製 鋼 研 究 會
業務研究資料 第 19 卷 39 號	2 冊	鐵 道 大 臣 官 房 研 究 所
電氣要錄 第 7 卷第 11 號	1 冊	工 業 資 料 調 査 會
日本鑛業會誌 第 559 號	1 冊	日 本 鑛 業 會
セメント界彙報 第 271 號	1 冊	日本ポルトランドセメント同業會
電氣雜誌 第 12 月號	1 冊	電 氣 雜 誌 社
衛生工業協會誌 第 5 卷第 11 號	1 冊	衛 生 工 業 協 會
鐵道技術 第 5 卷第 11 號	1 冊	鐵 道 技 術 社
Imperial Academy Vol. VII, No. 8	1 冊	帝 國 學 士 院
東京工業大學一覽	1 冊	東 京 工 業 大 學 會
西洋建築史參考圖集	1 冊	建 築 學 會
日立評論 第 14 卷第 11 號	1 冊	日 立 評 論 社
コンクリート配合の合理化	1 冊	近 藤 泰 夫
三菱電機 第 7 卷第 11 號	1 冊	三 菱 電 氣 株 式 會 社
東京工業會誌第 33 卷 第 12 號	1 冊	東 京 工 業 會
電氣學會一覽	1 冊	電 氣 學 會
機械學會誌 第 34 卷第 176 號	1 冊	機 械 學 會
港灣 第 9 卷第 12 號	1 冊	港 灣 協 會
工業化學雜誌 第 34 編第 12 冊同歐文綴	2 冊	工 業 化 學 會
工學部紀要 第 6 卷第 4 號	1 冊	京 都 帝 國 大 學 工 學 部
地震研究所彙報第 9 號第 4 冊	1 冊	東 京 帝 國 大 學 地 震 研 究 所
セメント工業一月號	1 冊	土 木 建 材 商 報 社
工學彙報 第 6 卷第 5 號	1 冊	九 州 帝 國 大 學 工 學 部
鐵道技術 第 5 卷第 12 號	1 冊	鐵 道 技 術 社
セメント界彙報 第 273 號及第 274 號	2 冊	セメント界彙報發行所
電氣製鋼 第 7 卷第 12 號	1 冊	電 氣 製 鋼 研 究 會

電氣學會雜誌 第 51 卷第 12 冊	1 冊	電 氣 學 會
東京工業會誌 第 34 卷第 1 號	1 冊	東 京 工 業 會
工學 第 20 卷第 1 號	1 冊	東 京 工 學 社
港灣 第 10 卷第 1 號	1 冊	港 灣 協 會
電氣要錄 第 7 卷第 12 號	1 冊	工 業 資 料 調 查 會
電氣雜誌 新年號	1 冊	電 氣 雜 誌 社
工業 第 6 卷第 1 號	1 冊	東 京 工 業 大 學
日立評論 第 14 卷第 12 號	1 冊	日 立 評 論 社
帝國鐵道協會報 第 32 卷第 12 號	1 冊	帝 國 鐵 道 協 會
明電會ジャーナル第 7 卷第 6 號及第 8 卷第 1 號	2 冊	明 電 會
機械學會誌 第 35 卷第 177 號	1 冊	機 械 學 會
內外工業時報 12 月號及新年號	2 冊	最 新 工 學 普 及 會
帝國學士院紀事 第 7 卷第 9 號	1 冊	帝 國 學 士 院
浪速工業時報 第 27 號及會員名簿	2 冊	浪 速 工 業 會
建築業協會報 第 14 卷第 5 號	1 冊	建 築 業 協 會
鐵と鋼 第 17 年第 12 號	1 冊	日 本 鐵 鋼 協 會
三菱電機 第 7 卷第 12 號及第 8 卷第 1 號	2 冊	三 菱 電 機 株 式 會 社 神 戶 製 作 所
仙臺高等工業學校紀要 第 10 冊第 2 號	1 冊	仙 臺 高 等 工 業 學 校
建築雜誌 第 45 輯第 552 號及名簿	2 冊	建 築 學 會
都市公論 第 15 卷第 1 號	1 冊	都 市 研 究 會
衛生工業協會誌 第 5 卷第 12 號及會員名簿	2 冊	衛 生 工 業 協 會
日本鑛業會誌 第 47 卷第 560 號及會員姓名簿	2 冊	日 本 鑛 業 會
土木建築雜誌第 11 卷第 1 號	1 冊	シ ン ビ ル 社
土木建築工事畫報 第 8 卷第 1 號	1 冊	工 事 畫 報 社
明治工業史提要	1 冊	會 員 田 邊 朔 郎 君
造船協會雜纂 第 11 號及會員名簿	2 冊	造 船 協 會
工學報告 第 10 卷第 2 號	1 冊	東 北 帝 國 大 學 附 屬 圖 書 館
業務研究資料 第 19 卷第 41 號	1 冊	鐵 道 省 大 臣 官 房 研 究 所
日本建築士 第 9 卷第 5 號及第 6 號	2 冊	日 本 建 築 士 會
大阪港勢一斑	1 冊	大 阪 市 役 所



故 前會長 工學博士 仙石 貢君 ..

故 前會長 工學博士 仙石 貢君略歴

仙石貢氏は高知藩士、仙石彌次馬の二男にして安政四年六月二日高知城下に生る、其祖は福島正則の重臣にして但馬久勝に至り山内一豊に仕へ代々山内家の中老職を襲ふ、父君は明治維新の際藩内安藝郡の郡奉行たりき、年少の頃藩學致道館に文武の道を修め、維新後舊藩主山内容堂侯英人を聘して醫學所を開き醫學、英學の教授を開始するや率先して之に入學し英學を學ぶ、十六歳にして上京し、伯爵後藤象次郎氏邸に寓し、氏の指導する所に従ひ、東京大學理學部に入り土木工學を専攻し、明治十一年七月二十二歳を以て卒業するや、直ちに東京府雇となり土木課測量掛として技術家生活の第一歩に入る、在職三年にして之を辭す。

明治十四年八月東北鐵道會社の創立せらるゝや、入りて其創立事務に従事す、明治十七年二月工部省御用掛を拜命し同時に鐵道局勤務を命ぜらる、同年十二月工部卿日本鐵道會社の大宮宇都宮間鐵道線路起工の命を下すや、命を受け同區間中の中田宇都宮間の工事を擔當し、翌年九月白河、福島間の鐵道建設工事を擔任す、明治十九年五月鐵道四等技師に任ぜられ奏任官四等に敘せらる。

明治二十一年一月甲武鐵道會社の新宿立川間鐵道工事を鐵道局に於て施行するや復其工事の擔任を命ぜらる。同年六月鐵道工事實地取調の爲歐米各國に出張を命ぜらる、此間信越線横川輕井澤間アプト式齒狀軌道實施に就き獻策して採用さる。

明治二十二年東京市區改正の設計なるや、命によりて東京中央停車場及新橋上野間、高架線連絡の調査に従事す。明治二十三年五月鐵道三等技師に任ぜらる。同二十四年八月工學博士の學位を授けらる。同二十五年七月鐵道廳に十五名の線路取調委員設置せらるゝや其一員に選ばる、次で監督員を命ぜられ山陰線、舞鶴線、和歌山線の調査を擔任す。明治二十六年三月鐵道會議々員、八月臨時製鐵事業調査委員會委員を仰付らる。同年十一月遞信技師兼遞信省鐵道技師に任ぜられ、同時に鐵道局監理課長を命ぜらる。

明治二十七年日清戰役に際し十月陸軍省御用掛を命ぜられ韓國釜山、京城、仁川等の各地に差遣せらる。明治二十八年十一月日清戰役の勳功により勳四等に敘し旭日小綬章を授けられ、從軍記章を授與せらる。明治二十九年九月遞信省鐵道技監に任ぜられ高等官二等に敘せらる、此間軌制取調委員に擧げられ「廣軌鐵道に關する意見」と題し有力なる意見を提出し廣軌説を主張す、其後明治四十四年四月廣軌鐵道改築準備會官制の成立と共に其委員を仰付られ又後年鐵道院總裁たるに至るも尙此問題に就き非常なる努力を拂ふ。

明治二十九年十月願に依り官を辭し、同十一月筑豊鐵道株式會社專務取締役社

長となる。明治三十年八月製鐵所創立事務を囑託せらる。明治三十一年四月九州鐵道株式會社專務取締役社長となり、鐵道國有法の實施迄其職に在ること十年に達す、此間日露戰役勃發するや軍隊輸送の命を受け自ら門司に出張し衆を指揮し盡力頗る大なるものあり、同三十九年四月其功により勳三等に敘し瑞寶章を賜ふ。

明治三十九年七月南滿洲鐵道株式會社設立委員を仰付らる、明治四十一年五月高知市より推されて衆議院議員となり、爾來當選する事三回、初め戊申俱樂部を組織し、後故桂太郎公を輔けて立憲同志會を創立し次で液加藤高明伯と相許して憲政會の重鎮となれり、晩年貴族院議員に勅選せられ憲政會の後身民政黨に重きを爲したるも幾許もなく辭職す。

明治四十四年十月猪苗代水力電氣株式會社を起し、大正十二年に至る迄社長又は專務取締役をして終始し、大正三年十二月其第一期工事を完成し本邦に於ける水力電氣並に長距離電力輸送界に一新紀元を畫したり。此間明治四十二、三年の交より日本窒素肥料株式會社の計畫に參與し、大正九年工學博士白石直治氏の後を襲ひて取締役となり大正十三年に及ぶ。

大正三年四月鐵道院總裁に任ぜられ鐵道建設改良七年計畫を樹立し將來の鐵道の建設改良方針を確立す。

大正四年四月大正天皇の即位大禮に際し、大禮使參與官に任ぜられ大禮輸送事務の大任を完ふす。大正九年一月社団法人土木學會々長に當選し一年の任期を全ふす。

大正十三年六月鐵道大臣に任ぜられ信濃川發電計畫と相俟ち、東京附近に火力發電所新設の議を決し、多年の懸案たる省用電力自給の大方針を確立し、翌十四年七月國有鐵道空前の大事業たる鐵道車輛連結器の取替作業を斷行し、列車運轉上劃期的效果を實現せり。大正十五年一月日獨戰役に關する大正三、四年事件の功に依り勳一等瑞寶章を授けらる。

昭和四年八月南滿洲鐵道株式會社總裁仰付らる。昭和五年九月內務省土木局御備長工師勳四等蘭人故コリネリス・ヨハンネス・ファンドールン氏の、本邦土木治水事業に對する功績を永久に傳へんと欲し、氏の銅像を猪苗代湖畔に建設せん事を期し、翌昭和六年十月十四日竣工其除幕式を舉行す。其年二月滿洲より東上の途、車中疾を得遂に起たず、十月三十日神奈川縣片瀨の邸に歿す。享年七十有五、長きあたりに於ては生前の功勞を思召され從三位に敘し旭日大綬章を賜はる。

氏の性格は率直、豪快、淡泊にして毫も陰翳を存せず、肝癪持ちにして雷爺と稱せらるゝも、一面友情に厚く情誼を重んず、然して私心、私慾は其最も排する所也。趣味は圍碁、ゴルフにしてまた讀書を好む、嗜好は酒煙草にして最も愛好せり、宗教は宗格上神道に屬す、遺族は未亡人及び女子四名あり、一女に智養子し家督を相續せしむ。